

かつて「東の電通、西の萬年」と称された広告会社があった。1890年、大阪に誕生した萬年社は、創業者がいち早く海外の広告事情を観察するなど、業界をリードする存在だった。だが残念なことに、その歴史は1999年で終わっている。

萬年社研究に関しては、まず山本武利先生が先鞭をつけられた。その後同社の旧蔵資料は、大阪市立大学などで整理が進んでおり、私の所属する大阪メディア文化史研究会でも、その歴史を調べ直し、本にまとめるべく研究活動を行っている。

私がとくに興味を抱くのは、戦前、萬年社が日本ゼネラル・モータースの新聞広告を一手に扱っていた点である。フォードが横浜に進出したのに対し、1927年にGMは大阪市正区、今のイケア鶴浜店あたりに工場を建て、本社機能を置いた。

プロトナード

その背景に、当時の「大阪」の隆盛があつたことは想像に難くない。関西圏の経済や人口の規模は、首都圏に匹敵するほどだったのだ。

だが、日本GM社が36年に発行した「工場參觀の葉」(見学者用パンフレット)などを眺めていると別



原武史氏の著書『「民都」大阪対

「帝都」東京』では、官主導の鉄道開発に対して小林一三の阪急など、

関西は民営鉄道のメッカであったと述べられている。たしかに「お上に

まかせられるかい!」は、関西の

氣風なのである。

と記されている。要するに大陸への販路拡大のために、大阪は格好の拠点だったのである。

だが戦後の関西は、それなりに元気だった。阪急局がヒット番組を連続するなど、芸能・演芸の都であつてし続けた。初期のスポンサーの業種が、薬品・織維・家電・食品などであったことも、関西の広告業界の活況につながっていた。

しかし、東京一極集中の流れ、産業構造の変化の中で、かつては「西の雄」とされた萬年社も衰微してい

く。まだ、元来グローバルな企業だったはずなのに、同社は国際化への対応にも後れをとった。

関西に立地する大学に勤める身としては、萬年社の軌跡から多くの教訓を得たといひである。世間が「グローバル、グローバル」といわずにはるか前から、グローバルであった土地柄や校風を大切にしたいと思う。関西の活路を、世界に運ぶ人材のインキュベーションの場となることを求められないものだらうか…。

柄にもなく、やや大風呂敷を広げてしまつた。話を冒頭の大坂メディア文化史研究会に戻そう。同研究会の会合には、時には山本武利先生はじめ東京からご参加の方もあり、津金澤聰廣先生もお見えになる。若手のメンバーも増えてきた。関西のメディア史研究の火を絶やすぬよう努めていきたいのだ。(社会学者)

イチゴ狩りの季節 車

イチゴ狩りのシーズンが本番を迎えるアルハウスの中で、たわわに実ったイチゴの収穫はこの季節ならではの楽しみ。施設を食べ比べられたり、イチゴを使った料理するところもある。週末はイチゴが歩くで、早めの時間帯に訪れるのがお薦めだ

都心から車で約1時間。田園地帯にビニールハウスの一群が現れる。関東最大級というイチゴ狩り施設「越谷いちごタウン」(埼玉県越谷市)だ。ハウスに足を踏み入れると夏のような暑さで、端から端までイチゴの棚が並ぶ。

人気・希少品種 6種類を食べ比べ

同園では8棟のビニールハウスで約6万4000株のイチゴを栽培



荒々しい